

「マン・オブ・スティール」★★★★

2013（平成25）年8月31日鑑賞<TOHOシネマズ梅田>

監督：ザック・スナイダー

クラーク・ケント（スーパーマン、ジョー=エルの息子、カル=エル）／ヘンリー・カビル

ロイス・レイン（デイリー・プラネット紙の敏腕記者）／エイミー・アダムス

ゾッド将軍（クーデターを起こす、惑星クリプトンの軍の司令官）／マイケル・シャノン

ジョー=エル（惑星クリプトンの科学者、クラーク・ケントの父）／ラッセル・クロウ

ジョナサン・ケント（クラーク・ケントを拾い育てた父）／ケビン・コスナー

マーサ・ケント（クラーク・ケントを拾い育てた母）／ダイアン・レイン

ララ・ロー=ヴァン（ジョー=エルの妻）／アイエレット・ゾラー

ファオラ=ウル（ゾッド将軍の冷酷なる副官）／アンチュ・トラウエ

ペリー・ホワイト（デイリー・プラネット紙の編集長）／ローレンス・フィッシュバーン

ネイサン・ハーディ大佐（米北方軍に所属する空軍大佐）／クリストファー・メローニ

スワンウィック将軍（米北方軍の司令官）／ハリー・J・レニックス

エミール・ハミルトン博士（国防研究局に所属する科学者）／リチャード・シフ

2013年・アメリカ映画・143分

配給／ワーナー・ブラザース映画

<壮大な世界観とその映像美は圧巻！>

地球は太陽系にある惑星だが、地球温暖化やオゾン層の破壊が続けば、その寿命が縮まる可能性は大。『宇宙戦艦ヤマト』（77年）は、日本人の魂ともいえる（？）「戦艦大和」をモチーフとして、異星人ガミラスの攻撃により放射能汚染された地球を救うべく、宇宙戦艦ヤマトが放射能除去装置を受け取るため大マゼラン星雲にある惑星イスカンダルを目指す壮大な物語を描いたものだが、『スーパーマン』はその逆。つまり、遠い遠いクリプトン星から「ある事情」によって地球にやってきた異星人の物語で、『スーパーマン』は1938年に生まれたアメコミのヒーローだ。しかし、クリプトン星とは？また、ある事情とは？

本作冒頭に描かれるクリプトン星でのストーリーは、地球上でのわずか数万年の人類の歴史の中でくり返されてきた権力闘争とよく似ているから、それ自体には新鮮味はないが、その壮大な世界観と映像美は圧巻！もっとも、そこに登場する現代の地球人の科学をはるかに超えた各種文明の利器は、若い人たちの目には新鮮かもしれないが、携帯やiPadすら一部の機能しか使えない私の目にはあまりにも異質だ。アメリカの特撮テレビ番組『スーパーマン』は子供の頃に見た記憶がある（もちろん再放送）し、宇津井健がそれを真似た日本の特撮テレビ番組『スーパージャイアンツ』（57～59年）の記憶は鮮明。なるほど、スーパーマンはこうやって赤ん坊の時に地球にやってきたわけだ。

ちなみに、そんな壮大な冒頭のシーンを観ていると、私の頭の中にはどこかに既視感が……。そうそう、これは、「ヘブライ人の男の赤ん坊は皆殺しにせよ」とエジプト王から命じられた際、籠に入れられてナイル川に流された一人の赤ん坊が王女に拾われて命を救われ、モーゼと命名された物語と同じだ。『十戒』（56年）に見るモーゼはその後王子として育てられたが、クリプトン星でジョー=エル（ラッセル・クロウ）とララ・ロー=ヴァン（アイエレット・ゾラー）の間に生まれたこの赤ん坊は、地球にたどり着いた後、どんな少年に、どんな大人に成長していくの？

<異星人の憂鬱とは？普通が一番？それとも……>

カンザス州スモールヴィルで、代々、農場を営んできた農夫のジョナサン・ケント（ケビン・コスナー）と、その妻マーサ・ケント（ダイアン・レイン）の下で成長したクラーク・ケント（ヘンリー・カビル）は今、周りのみんなと違う驚異的なパワーを持っていることに戸惑いを覚えている。人の10倍の力がある、人の10倍速く物が見える、等々の超能力は、それがあれば優れているのだから嬉しいし、誇りに思えるのでは……。誰でも一瞬そう思うが、それなら手が2本ではなく3本あれば、指が5本ではなく10本あれば、あるいは100mを10秒ではなく1000mを10秒で走れたら、あなたは嬉しい？

近時、性同一性障害の問題が浮上するとともに、同性婚も社会的に認知されつつあるが、これだって昔はカミング・アウトすれば社会から変な目で見られていたものだ。地球上に約70億人存在する人間は、一方では異質で人より優れていることを求めながら、他方では同質でみんなと同じレベルであることを求めるわけだ。多感な少年時代を迎えているクラークだって当然そうだから、父親のジョナサンに対して「僕って変なの？」と質問していたが、それに対するジョナサンの答えは？

クラークの生みの親であるジョー=エルは、クラークが成人し、「自分探しの旅」を始める中で何度もスクリーン上に登場してくるが、育ての父親となったジョナサンは、ある日ハリケーンに巻き込まれる中でクラークが秘密の力を発揮しようとしたのを制止したまま、あっけなくあの世へ行ってしまった。僕は、なぜ普通じゃないの？そんな憂鬱と日々葛藤しながら、さらに育ての父親の死を乗り越えながら、クラークはいかにして成長していくの？

本作は『マン・オブ・スティール』というタイトルだが、それはあくまでスーパーマンとしての力を発揮する時の彼を表現したもの。しかし、「スーパーマン」ことクラーク・ケントという男の内面は極めてナイーブで、地球上の人間が常に持っている心の悩みと同じ、いやそれ以上の悩みを抱えながらの人生だったわけだ。

<ゾッド将軍の価値観は？なぜジョー=エルと対立？>

クリプトン星滅亡の原因は、変革を嫌う元老院の守旧的姿勢にある。その認識は、ジョー=エルもゾッド将軍も同じだった。しかし、ジョー=エルはクリプトン星のコデックス（遺伝情報）と共に生まれたばかりの赤ん坊を、滅亡するクリプトン星からどこか別の惑星に移動させることに希望を託したのに対し、ゾッド将軍はもっと現実的。すなわち、彼は元老院をぶっ潰すクーデターを起こし、選ばれた筋筋の者がクリプトン星を支配するべきと主張したわけだ。こうなれば、長年親友として信頼し合っていた2人の訣別は仕方ない。その結果、ジョー=エルはゾッド将軍に殺されてしまったが、彼が赤ん坊に託したコデックス（遺伝情報）は今どこに……？

中東のエジプトでは2012年6月に民主的な大統領選挙によりイスラム系穏健派グループのモルシ氏が当選したが、今年7月にはそのモルシ大統領を強硬派の軍部が追放するという大変な事態となった。これは一面では軍事クーデターの成功ともいえる状況だが、日本における陸軍青年将校が決起した「五・一五事件」（32年）や「二・二六事件」（36年）は失敗に終わった。また、『終戦のエンペラー』（12年）で描かれた、日本の敗戦を受諾する天皇陛下の「玉音盤」をめぐる陸軍の一部青年将校たちのクーデターも失敗した。それと同じように、ゾッド将軍たちのクーデターは見事に失敗し、逮捕されたゾッド将軍は副官のファオラ=ウル（アンチュ・トラウエ）らと共に、ファントム・ゾーンに追放されることに。ここらの世界観も壮大で映像は美しいが、難点は理解が難しいこと。結局、クリプトン星が爆発してしまったことによってファントム・ゾーンという「永遠の監獄」から解放されたゾッド将軍たちは自由を取り戻し、今は惑星改造船ワールドエンジンを本拠としていた。そして今、彼らはクリプトン人を復活させるべく、コデックス（遺伝情報）を追って宇宙へ旅立つことに。

さあ、こうなれば、ジョー=エルがクリプトン星から離脱させた赤ん坊が、今大人になって住んでいる地球にゾッド将軍たちが到着するのは、時間の問題……。

<本作のテーマは、クラーク・ケントの自分探しの旅！>

私は、ロクな仕事にも就かない（就けない？）くせに、口だけは一人前に「自分探しの旅をしている」とシャーシャーと語る今時の若者が大嫌い。しかし、地球上でたった一人だけ存在する異星人として育ったクラークが、物心ついた頃から大いに悩み、大人になった今「自分探しの旅」をせざるをえないのは当然。地球上での本格的ストーリーが展開し始めるのは、デイリー・プラネット紙の女性敏腕記者ロイス・レイン（エイミー・アダムス）が、カナダ北部の氷の中に眠る1.8万年前に地球に飛来したクリプトン星の探査船を調査する中で、クラークの異星人としての本性を知った時からだ。ピューリッツァー賞受賞経験もあるロイスにしてみれば、再度その賞を狙える絶好のネタだから、逃げ回るクラークを追ってロイスの追跡はどこまでも。そして遂にクラークの母親マーサが住む農場までたどり着いたが、この時は、やっとクラークの居所を確認できたゾッド将軍たちも地球にやってきたから、さあ大変だ。

ゾッド将軍たちの要求は、クリプトン星人のクラークを引き渡すこと。それさえすれば地球には何の危害も加えないとゾッド将軍は約束したが、それって信用できるの？他方、そんな風に急変した事態を受けて、クラークは自分こそ引き渡しを求められているクリプトン星人だと名乗り出たが、対異星人作戦の責任者であるスワンウィック将軍（ハリー・J・レニックス）や、科学者のエミール・ハミルトン博士（リチャード・シフ）はそれに対してどんな対応を？亡き育ての父ジョナサンから、その力を隠すように言われていたクラークは、今スーパーマンとしてのパワースーツを着て登場したが、彼はこれから何をしようとしているの？その隠されたパワーを発揮するターゲットは、地球人？それとも、同じ星に生まれたゾッド将軍たち？その結論を出すことができたのは、きっとクラークが「自分探しの旅」を完了させることができたからだろうが、その展開はいかに？

<重量級の衝突は、『アイアン・フィスト』の方が上>

本作のクライマックスは、地球と地球人を守ることを決意したスーパーマンと、ゾッド将軍やその副官ファオラたちとのアイアンとアイアンとがぶつかり合う重量級の衝突。ちなみに、スーパーマンと言えば、赤いマントと赤いショーツそして胸にSのマークを刻んだスーパーマン・スーツがトレードマークだが、なぜか本作では赤いショーツが消えている。また、ストーリー展開の中で語られるのは、これまでスーパーマンの象徴であった「S」のマークはスーパーマンのイニシャルではなく、クリプトン星に住むエル家の紋章で「希望」を意味するということだ。普段は地球人に成りすましていくクラークがスーパーマンに変身し、パワーを発揮するためには、このスーパーマン・スーツを着用することが必要不可欠だから、クライマックスではたっぷりそのスーパーマンの勇姿が見られることになる。もっとも、対するゾッド将軍やファオラたちはスーパーマンと同等ないしそれ以上のパワーを持っているから、勝敗を分けるポイントは？その最大のポイントは、地球上の大气に慣れてしまったスーパーマンが地球の大气中で戦うのか、それともクリプトン星の大气中で戦うのかということだが、それをめぐっていかなる知的闘争が……？

ちなみに、アイアンとアイアンとの衝突といえば、去る8月15日に観た『アイアン・フィスト』（12年）を思い出す。重量級の衝突の面白さという観点で比較すれば、ハッキリ言って私の目では『アイアン・フィスト』の方が上。ただ、本作がすごいのは卓越したスピードだが、肝心のアクションはぶつかり合い、殴り合いと投げ合いばかりだから、テクニクが感じられない。ちなみに、ゾッド将軍はナイフのひと刺しでスーパーマンの父親であるジョー=エルを殺しているのに、この対決の場ではゾッド将軍もスーパーマンもなぜそのような武器を使用しないの？近時公開される『ウルヴァリン：SAMURAI』（13年）のように、スーパーマンが日本刀を使用すれば、もっと面白くなるのでは……？

デイリー・プラネット紙が入っている超高層ビルをはじめ、林立するビル群の威容は「いかにも、これぞアメリカ！」という感が強い。そして、惜しげもなくこれらを崩壊させていくスーパーマンとゾッド将軍との衝突はある意味で爽快感もあるが、こんな戦い方は邪道では？本来なら、スーパーマンは人っ子一人いない野っ原や山の奥にゾッド将軍たちを引っ張り込み、そこで雌雄を決すべきなのでは？もっとも、それではハリウッドが要求するエンタメ水準には到底到達しないだろうが……。